

初冬の巻機山は輪カンジキを使うほどの積雪はなかったが、山頂稜線は季節風が吹き荒れ、厳しい冬山の様相だった。神奈川県連盟「地平線の会」の雪山トレーニング。



季節風に煽られる 巻機山稜線で

山のカメラマン

鈴木 澄雄

新雪の尾根を快調に登る。風も弱く穏やか過ぎるような天気だったが、山頂には身体が飛ばされそうな季節風が吹き荒れていた。夏の暑さのほてりが残っている身には、厳冬期の山よりも寒さがこたえる。

「早く山を下りて、温泉だ！」

というのは近頃の風潮で、少し前までは山を下りて温泉という意識はなかったと思う。

テント山行から下山して、そのまま列車に乗り、空きスペースにキスリングを積み重ねていたら、女の子が興味深そうに近寄ってきた。そのとき「ばっちいから、そっちに行っちゃだめ」と母親から声がかかった。山の充実感に浸っていた心に世間の視線が突き刺さった。キツイひと言！

それ以来、自分たちの楽しみで山に興味がない人に迷惑をかけてはいけないな、と考え、ばっちくない山登りを心がけるようになった。が、なかなかうまくいかない。各地の山麓に立ち寄り湯ができて、身奇麗な登山者が増えたことは、登山界にとってもいいことだと思う。